

楷書作品の表現

楷書が洗練され完成されたのは、初唐の時代である。今日では、書の基本とされ最初に習う書体である。楷書は点画が明瞭で筆法も理解しやすいことから、楷書を通して書の基本を身につけるに適している。また、公の書類に記入する際の正式書体とされた期間が最も長い書体で、正書ともいわれる。

この完成された楷書は、正確で読みやすいという特徴のため、創作時に表現効果という点では平板になりやすく、書法的に高い完成度を要するものといえる。書の表現という点では、完璧で他の入り込む余地のない初唐の楷書より、荒削りゆえ表現に多様性のある完成する前の楷書に着目することも必要と思う。

今創作では、この未完成ゆえの自在で自由な表現法に加え、一画一画を続けず構築的に書くが、意は途切れることなく連続する「筆断意統」といわれる楷法の「意統」を意識した。各字は「筆断」一画一画を組み上げながらもそこに「意統」といわれる行意を加える

ことによる表現の多様性を意識した。また字画の多少による自然な文字の大小にし、極端な誇張は避けた。墨量はほぼ均一を基とし、意の連続による変化にまかせた。

行意を線の表現として表わした楷書作品としては、少しは効果があつたように思うが、巧まぬ多様な表現という点においては、もの足らず課題が残る作となった。

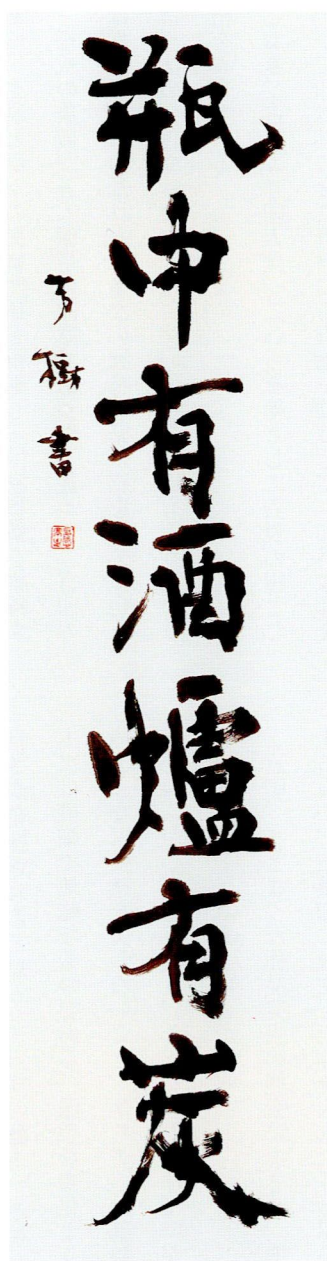
・用具用材

紙…台湾画箋

墨…墨汁

筆…和筆

歳 森 芳 樹
Yoshiki Toshimori



瓶中有酒爐有炭

136 × 34.9cm